

# 北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」

会報 かいほう ノーフェンス

ひとりの人間として、人類の歴史に禍根を残さないために、山の奥に封じ込められ、いのちの尊厳を冒瀆されている人たちを放置しない。



(NO FENCE IN NORTH KOREA)

**NO FENCE**

# NO FENCE

vol. **18**

2012年 10月

E-mail: nf-staff@netlive.ne.jp

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> (郵便振替口座) NO FENCE / 00180-1-707147

## 22号管理所内で2010年から食糧供給削減し大量餓死…意図的飢餓殺人か 22号管理所閉鎖 消息(再) 宋允復

当会会報15号で22号管理所閉鎖の報をお伝えした。その後いくつかの媒体で続報がなされているので紹介する。

RFA 文星輝記者による9/27付続報

[http://www.rfa.org/korean/in\\_focus/prisoncamp-09272012101637.html](http://www.rfa.org/korean/in_focus/prisoncamp-09272012101637.html)

○2010年に入ってから22号管理所内で一日の食糧供給を冬は300g、夏は200gに制限し餓死者続出。2009年11月30日付で断行したいいわゆる「貨幣改革」(デノミ。民間に流通する紙幣の巻き上げ)の悪影響のしわ寄せとみられる。

○2011年秋からは「町歩当たり9トンのトウモロコシ生産計画を達成できなかった」ことを口実に、管理所内で生産したトウモロコシをすべて軍隊向けに供出してしまい、管理所内では一日トウモロコシ200g未満、一切供給されない日も多々あり、3万人余の収監者数が3千人程度に急減した。

○これ以上農場を運営する能力がなくなったので、今年3月中旬から残る収容者を化城(フアソン)の16号管理所に移した。

別の消息筋は

○22号管理所の警備隊員一部が残り、8月末までに監視・拘禁施設を破壊し痕跡をなくした。

○9月初頭からは咸鏡北道の協同農場から人員を選抜し、収容所跡地に移住させている。彼らについては1年間の配給を保障している。

宋の見解

※他の脱北者支援団体も22号管理所閉鎖の消息を把握しており、事実であろう。

※中国との国境に近く、すでにグーグルアースや衛星写真でもその存在が国際的に把握されている会寧22号管理所の閉鎖を数年前には検討していたのではないかと推測される。

※ただしその閉鎖は、収容者を釈放せず、過酷な労働に加え餓死させて人数を減らしていく意図的抹殺・証拠隠滅を伴っていると判断される。

※数は定かでないが数千名から1万名ほどの22号収容者が化城16号管理所に移送されたと複数のルートから情報が漏れている。

※韓国メディアは9月末、北朝鮮の吉州郡豊溪里の核実験場の坑道の一つが台風の水害により水没したと報じており、この核実験場に隣接する16号管理所に送られた収容者の運命が案じられる。

一方、デイリーNKは同じく9/27付(日本語版は9/28付)で、消息筋の話として、「22号管理所の解体は6月までに完了した。解体の切っ掛けは管理所の所長と幹部一人が中国に逃げたため」と報じた。

<http://japan.dailynk.com/japanese/read.php?catId=nk00500&num=16651>

これについて宋が韓国の脱北者団体その他に照会をしているが、今までのところ所長並びに幹部逃亡に関する情報は把握できていない。

## 注目すべきニュース旧東欧圏も北収容所慨嘆 (第20次人権理事会報告)

RFA (自由アジア放送) ワシントン・ヤン・ソンウォン yangs@rfa.org 2012-06-29

北朝鮮の残酷な人権状況に対する国際社会の憂慮が漸増する中で、いまや旧東ヨーロッパ共産国家であるハンガリーとチェコ、スロバキアまで北朝鮮の人権状況を嘆きました。スイス、ジュネーブで開かれている第20次人権理事会の便りをヤン・ソンウォン記者がお伝えします。

6月28日、個別国家人権状況(Item 4)について議論するジュネーブ国連人権理事会場。この日の会議で北朝鮮の人権状況を慨嘆した国は9ヶ国です。

伝統的に北朝鮮人権問題に関心の多い米国とカナダ、スウェーデン、オーストラリア、日本そしてスペインも北朝鮮の人権問題、特に政治犯収容所問題を集中的に論じました。だが、この日特異だったのは旧東欧圏であるハンガリー、スロバキア、チェコまでもが北朝鮮の残酷な人権状況を非難したという点です。

特にスロバキア代表は、北朝鮮がキム・ジョンウン体制になった後にも人権改善の動きが全く見られないと嘆きました。

**スロバキア代表:** 権力委譲以後にも北朝鮮の残酷な人権状況に対する肯定的な変化の信号を全く見いだせません。スロバキアは北朝鮮の数多くの政治犯収容所に不当に任意拘禁され強制労働に苦しめられる収監者に対する国際社会の関心を再度促します。

ハンガリー代表も北朝鮮の政治犯収容所実態など残酷な人権状況を非難しました。

**ハンガリー代表:** 北朝鮮の政治犯収容所には数十万の収監者が残酷に、また体系的に人権を蹂躪されると報告されています。北朝鮮の政治犯収監者は約20万人と推算され、本人はもちろんその家族も公正な裁判なしで閉じ込められている状況と知られています。

また、**チェコ代表**も北朝鮮の残酷な人権蹂躪状況は国際社会の大きい憂慮として残っているとしました。チェコ代表は特に北朝鮮が国連の北朝鮮人権特別報告官の活動に協力しないことに対して遺憾を表明し、北朝鮮が直ちに特別報告官の活動に協力するよう促しました。

米国代表も北朝鮮の政治犯収監者数を13万人から20万人と推定し、北朝鮮当局は直ちに政治犯収容所を撤廃しなければならぬと強調しました。

米国代表: 北朝鮮当局は政治犯収容所を必ず直ちに撤廃しなければなりません。そこには子供を含んで13万人で20万人が収監されていると知られています。

カナダ代表は北朝鮮当局の体系的な人権蹂躪事例をいちいち具体的に取り上げ論じました。カナダ代表が取り上げ論じた問題はまず任意拘禁と公開処刑、拷問と強制堕胎、児童労働搾取、連座制適用、政治犯の終身拘禁、そして北へ送還された脱北者に対する残忍な処遇などです。

その他にスウェーデン、スペイン、オーストラリア、日本側代表もこの日の理事会で北

朝鮮の政治犯収容所など劣悪な人権状況を嘆きました。

ジュネーブ外交消息筋は6月29日自由アジア放送(RFA)に、かつての共産国家まで北朝鮮の政治犯収容所問題を批判し出したのは、過去その国々も政治犯収容所に関する経験があるためであることだと分析しました。

また、この消息筋は最近全般的に北朝鮮人権状況に対する国際社会の関心が高まっており、特に政治犯収容所や脱北者など個別具体的な北朝鮮人権問題まで議論されることが最近の傾向だと説明しました。

また、北朝鮮の核問題解決議論が遅々と進まないなか、米国と韓国政府が特に北朝鮮の人権状況と民生問題を集中的に取り上げている影響もあると説明しました。

一方北朝鮮代表もこの日理事会で答弁権を通じてオーストラリア、カナダ、スペイン、スウェーデン、チェコ、ハンガリー、スロバキアを個別に名指ししながら、根拠のない対北朝鮮人権非難とダブルスタンダードを受け入れないと強調しました。北朝鮮側は彼らの国で横行する人種嫌悪犯罪と人種差別、宗教差別などには意図的に沈黙していると非難しました。

(編集者コメント：とてもいいニュースです。国際社会が動き出しているいい証拠です。)

## インサイダーが見る金正恩体制の内情

### 海外派遣労働の奴隷的実態を報告

#### 姜哲煥氏ら緊急来日

10月27日(土)午後2時からアジア人権人道学会開催

#### 明治大学(御茶ノ水・駿河台)リバティータワーにて

金正恩体制になってから体制維持の要となる外貨獲得を目的に労働力の海外派遣が増えています。

その奴隷的拘束の実態を経験者が証言、包括的な研究報告も行います。

また、最近韓国入りした元治安機関高官による金正日死去時の内情と金正恩体制の展望等、機微に触れるインテリジェンスが披露されます。

公開の場で明かすリスクについて判断に苦しむところですが、

姜哲煥さんらの熱意により日本にて初公開されます。

教室番号等詳細を近日中にNO FENCE ホームページに掲載します。

会員各位のご参集をお願いいたします。

問合せ先：宋 070-5459-9817

編集者解説： 去る9月25日ソウルで「北朝鮮の海外強制労働撤廃国際連帯」(International Network for Human Rights of North Korean Overseas Labor)INHLという組織が結成されました。以下の文はその時の基調講演の一つです。姜哲煥氏の呼びかけでNO FENCEから砂川代表と私(小川)が顧問に加わりました。前頁の案内は海外での最初のシンポジウムです。

## 北朝鮮海外勤労者の人権改善案

北朝鮮人権情報センター理事長 金尚憲

### 1.北朝鮮海外勤労者派遣:その経過と実態

今現在の北朝鮮海外勤労者は約6万人程度がロシア、中国、中東、東南アジア、アフリカおよびヨーロッパなどで労働しており、数万人以上が派遣待機中だと調査されています。

1967年度にロシアに伐木労務者派遣を始め、1970年代にはアフリカ地域、1991年からは中東地域に派遣し、最近では東南アジア、モンゴルおよびヨーロッパ地域に派遣されています。

韓国では70年代中東地域で多くの勤労者たちが送出された歴史もあります。海外勤労者派遣は発展途上にある多くの国家の傾向であり、私たちの韓国にもすでに100万人を越える外国勤労者たちが来ていて、韓国の高級人材が海外で先端技術工事現場でたくさん活動しています。したがって海外勤労者派遣それ自体が問題になっているのではありません。

単にその手続きと過程で勤労者たちの権利および人権が侵害されたり賃金が不当に搾取されたり作業環境が劣悪ならば、これは国際的に問題になって国際犯罪となっています。

このような事例が世界の一隅で発生しているなら、私たちはじっとしてはいけません。

### 2.ロシアの場合

北朝鮮海外勤労者が一番多い所がロシアです。1967年度にソ連共産党中央委員会書記ブレジネフと金日成主席の間でソ連と北朝鮮間の相互友好条約が締結され、その離れ屋で北朝鮮労働者のソ連派遣秘密協定が結ばれました。しかし調査によれば2次世界大戦直後第1次で北朝鮮勤労者たちがソ連に派遣され、主に魚処理加

工場で仕事をしました。この時、勤労者の数が家族を含んで約 25,000 人程度だったといえます。

したがって 1967 年の秘密協定による伐木労働者派遣は第 2 次になるでしょう。この時、北朝鮮海外労働者受け入れのために悪名高いソ連政治犯収容所をそのまま引き継いだり、新しい収容所の建設が認められました。こうしたところに派遣されるために北朝鮮では 100 対 1 の競争をしなければなりません。世界が怖気をふるうソ連の政治犯収容所に行くために 100 対 1 の競争に勝ち抜かなければならない現象は、北朝鮮内部の生活条件が地獄そのものであることを示すものです。

第 3 次はプーチン執権以後です。特にプーチン大統領は北朝鮮海外労働者派遣を強力に推進し、これはロシアに対する北朝鮮の借金返済の一手段でした。言い換えれば「借金を返せ。金がなければ体でも返せ」とする立場でした。

今現在ハバロフスクとアムール地域に約 10-20 ヶ所程度の北朝鮮伐木労働者作業所があり、各収容所に 1,000 人程度の伐木労働者が労働しています。これら作業所は平壤からは約 1,200km 程だが、モスクワからは約 7,000km 程離れているので、これら作業場でどんなことが行われているのかあまり世に知られていません。

約 6 つのロシア労働力管理(マンパワー)会社が北朝鮮海外労働者供給業務を受け持っていて、これら会社が賃金の約 66%を取って行きます。これら会社は北朝鮮労働者を特に好むのですが、その理由は他の外国人の場合、伐木装備などを要求するが、北朝鮮労働者は素手で作業するからです。初めは囚人を派遣した場合もあったが、1970 年代からは一般民間人を派遣しています。

毎日 12-17 時間作業が強要され、施設が極度に劣悪で、零下 40 度を上下する酷寒で多くの勤労者が凍傷に苦しめられています。それだけでなく劣悪な作業環境で事故が多発していて、名目上医師はいるが、薬品不足で治療がほとんどなされていません。勤労者宿舎は夜には警備用電灯が明るく照らし、内部ではスピーカーを通した宣伝放送が長時間鳴り響いています。すべての勤労者は閉じ込められていて外部との接触が遮断されています。そしてあちこちに指導者の肖像画と宣伝の看板が見えます。朝鮮民主主義人民共和国の縮小版です。

ロシア送出会社が 66%を控除した後、残りの金額の中で山林庁が党の名目で取っていき、現場事務所の行政費等多くの項目の控除があります。北朝鮮政治集団が絞り取る金額はある計算によれば年 2,500 万ドルほどと推算されています。食糧は大きく不足し、肉は 1 年で指導者の誕生日など特別公休日など 3 回程度食べることができます。それで正式勤労の他に各種不法商業活動が作業所内で盛んに行われています。

勤労者たちは 24 時間監視を受けています。作業所は小規模人民共和国です。1,000 人規模勤労人員だがもれなく保安署、保衛部など監視組織があり、別途約 10 人余り、時には 20 人近い行政監督員があります。北朝鮮内のすべての不条理と苛

酷な行為慣習がこれら生活でそのまま続いています。例えばある作業者が自らの作業量を完遂できないと集団全員が処罰を受けます。朝鮮民主主義人民共和国はどこでも同じです。海外作業現場だと例外ではありません。あれこれの理由で拷問、苛酷行為は日常茶飯事です。膝下に角材を入れて座らせたり殴打する慣例がそのまま海外作業場でも行われます。殴打または独房拘留などの苛酷な処罰は日常茶飯事です。

最も苛酷な処罰の一つは、現場作業と関係ない汚い作業をさせながら賃金をほとんど支払わない処罰です。概して3年契約ですが、1年も過ぎると北朝鮮に帰りたいと望む勤労者が多数出て、少なくない数が現場を脱出します。

沿海州地方にはさまざまな建設現場が多いです。北朝鮮勤労者は徐々に伐木作業から建設現場に移動する傾向が見えます。その他に、収入も良くて作業も容易なので、時には監視員にわいろを捧げて周辺のロシア人家庭で雑役をする事例が少なくありません。

### 3.中東の例

主にカタール、クウェート、サウジアラビアなど中東地域に約8,000人程度の北朝鮮海外勤労者がいると把握しています。主に道路建設およびその他建設現場で作業しています。中東は賃金が世界的に非常に高い地域です。

バングラデシュなど第3国は労働力送出会社が主に斡旋しています。作業現場管理および賃金搾取の慣例はこの地域でも例外ではありません。こちらで北朝鮮当局が勤労者から賃金を絞り取る金額は驚くほど多いです。北朝鮮労働者の賃金が月5,000ドル内外であることを推算すると、その搾取金額は何と月3-4千万ドル年3-4億ドル程と推算されています。

### 4.その他の国家の例

最近ではアフリカおよび東南アジアなどの地に派遣される勤労者たちもいます。アフリカに7-8,000人程度、そして東南アジア各国に約15,000人程度と推算しています。強盗はどこでも強盗です。このすべての地域でも賃金搾取と劣悪な作業現場は同じことです。衣類加工および食堂運営などに動員されています。賃金搾取と監視の形式はロシアの場合と大同小異です。

### 5.海外勤労者の権利

聖書では一国家が発展する条件として4種類を要求しています。その二番目の条件は労働者の権利を保護しなければならないということです。ですから労働者の権利保護はキリスト教文化圏ではすでに14世紀から議論がなされ、18世紀19世紀英国

の産業革命と同時に正式に問題になりました。英国議会は当時英国工場法を制定したが、これが労働者権利保護の初めです。

第一次大戦が終わった後、当時の国際連盟(League of Nations)は国際労働標準を推進するために1919年に国際労働機構(International Labour Organization-ILO)を創設しました。

その後色々な歴史的変遷を経て今日のUN機構であるILO(国際労働機構)となっています。

今現在の約200の会員国、国連の中のほとんど全会員が加入しています。1969年度にはノーベル平和賞を受賞しました。国際労働機構は労働者の権利と人権が侵害された時抗議を受け付けています。会員国を制裁できる手段はないが、これを公論化し解決案を勧告しています。したがって21世紀現在すべての国際人権および労働者の権利、特に海外勤労者の権利はすべての国際協約が厳格に保障しています。すべての国際協約はこの世界のすべての国家の憲法と国内法の上位法であることは皆さんがよく知っておられるところです。

## 6. 今後の対策

労働者を搾取したり、彼らの人権・権利を蹂躪する行為は一つの破廉恥犯で、世界的に恥ずかしい犯罪です。この犯罪で非難を受ける国家はまずその場は色々な形で悪足掻きをするのですが、結果的にその恥辱のために頭を上げられず、徐々に消滅するというのが歴史の示す教訓です。何年か前にキム・テサン先生が勇敢に北ヨーロッパでの北朝鮮海外勤労者の惨状を知らせたので、大騒ぎになりましたし、今日私たちがこの場を持つに至ったのです。その後、当該政府はその作業契約を取り消しました。

今、北朝鮮政治集団が北朝鮮海外労働者から絞り取る金額は少なくない金額です。ではありますが、国家経営上からはちょっとした小金程度だろう。金額が問題ではないのです。このような苛酷な労働者搾取、国際犯罪が世界の片隅で広がっているのですから、私たちはじっとしてはいけません。これが今日、人の道理です。ましてその被害者が私たちの同胞であるなら、私たちは強力に抗議しなければならないでしょう。

しかし北朝鮮海外勤労者のみじめな搾取実態が十分に知らされていませんでした。私たちは力を集めて実態を徹底調査し、その結果を国際機構、国際言論および現地言論等を通して世界に知らせなければなりません。私たちが努める時国際社会はこの問題を解決できます。

## 山は動いた　いくつかの思い出とささやかな自負と

宋 允 復

「Escape from Camp 14」が今年3月に出版され、世界で怒涛の反響を巻き起こしている。欧米の主要メディア、クオリティーペーパーのほぼ全てに書評や紹介が掲載された。

今年9月までに英語、日本語を含む10言語版が発行された。今後さらに韓、露、中(繁体字)を含む10言語版の発行が予定されている(計20言語)。<http://www.blaineharden.com/>

著者のブレイン・ハーデン氏はワシントン・ポストの東京支局長だった。巻末には、著者に初めて申東赫について教えてくれた人としてリサ・コラクルシオ Lisa Colacurcio という人を挙げ謝辞を献じている。

このリサさんは東京在住の米国人で、アメリカの『北朝鮮人権委員会』(HRNK)の理事の一人。HRNK といえば Hidden Gulag や Taken! 等日本においても翻訳出版された優れた北朝鮮人権問題の報告書を発行している民間団体だが、リサさんはここを財政的にも熱心に支えている。当会 NO FENCE の集会にもご登壇いただいたことがある。

さて、申東赫(シンドンヒョク)が初来日したのは2007年12月、前身の守る会主催の收容所を告発する集会であった。翌08年3月の『收容所に生まれた僕は愛を知らない』出版記念講演、同年4月のNO FENCE 発足記念集会、同年10月下旬の「北朝鮮による拉致・人権侵害に取り組む法律家の会」招請、同年12月NO FENCE 主催国際会議と1年の間に来日が集中した。宋は運営、通訳と何かと共に過ごす機会が生じるのだが、この08年10月の来日の際も、合間を縫ってドンヒョク、土井香苗さんと麻布高校での講演や外務省でのロビーに回った。それを知って昼食の場を用意してくれたのがリサさんだった。リサさんは07年6月ニューヨーク・タイムズに掲載された Choe Sang-Hun 記者の記事を読み、ドンヒョクについて知っていたが、この丸ノ内での昼食会を切っ掛けに、当時ワシントン・ポスト東京支局長だった知人のハーデンさんに「取材すべきだ」と伝えた。同年12月にソウルでインタビューし同紙に記事が掲載され、その後ハーデンさんは10年6月にワシントン・ポストを退職して本書制作に集中し、今日に至っている。

ただ、「今日に至っている」と一言で済ませられるほど道程は平坦ではなかった。なぜかドンヒョクがこの新著の提案に乗り気ではなかったからだ。

「逆の立場を経験したい」と警察官になる希望を抱き、そのための資格試験予備校の学費が賄えないことを知ると、自ら韓国の警察庁長官宛に「機会を与えて欲しい」と直訴の手紙を出すほどの猪突猛進ぶりで、無料で勉強する機会を得た。しかし、いざ勉強を始めると、法律、英語などゼロから学ばなければならない事だらけで、何年掛かりで勉強したところで受かるのか覚束ない。脱北者に与えられる定着支援金も切れ、間欠的な食堂でのバイトで将来の見通しもない。そのうちアパートの家賃も払えず木賃宿に移り、携帯電話も繋がらないことが多くなった。それを宋から伝え聞いたリサさんは心配し、自身が勤務する不動産投資会社の伝手でソウルでの仕事の口を世話しようとしたが、簡単な算数もこ



なせないでは例えバイトでも不動産業で働くのは困難だった。そこで世話焼きのリサさんが頭を廻らしハーデンさんと相談して至ったのが新著出版のアイデアだった。旧著を翻訳出版しても欧米圏では受けないだろうというのが英語ネイティブや在米コリアン活動家たちの評価だった。それなら有数の書き手であるハーデンが新たに書き下ろした方がよい。

そこでまず立ち現れたのが旧著を発行した北韓人権情報センター(NKDB)との関係だった。金尚憲理事長率いるNKDBは多大な労力を投下してドンヒョクに聞き取りをし、整理してイラストも付し世に出した。韓国で3000部印刷して500部ほど捌けたのだが、その大多数は大手メディアや関係各所への寄贈であり、全くの持ち出しだ。ワシントン・ポストにドンヒョクが取り上げられ、他紙にも引用報道され大きな反響を呼んだ。ようやく世界に向けて発信し少しは回収できるかと期待する矢先、よそ者が乗り出してきてオリジナルの新著を出すことを了解して欲しいという。当然反応は芳しいものではない。特に薄給で実務の労をとっていたNKDBの若手たちには、これをドンヒョクも気にしていた。しかし、金尚憲さんが大局的判断をされ了解を与えた。

ハーデン氏はさらに出版社と交渉を進め、ドンヒョクが向こう当面生活に困らないほどの好条件を引き出してきたのだが、今度は肝心のドンヒョク本人が言を左右に避けようとする。「過去の体験を根掘り葉掘り聞かれる精神的負担に耐える自信がない」などと言いながら。リサさんはそれが不思議で仕方がない。「世界的関心と呼び起こして収容所に囚われた人たちを救う近道だし、あなた個人にも経済的メリットを伴うのになぜ？」宋を経由してそんなやり取りをしているうちに、アメリカの団体LiNKがドンヒョクを米国に招き、しばらくロサンゼルスに住みながら活動することになった。ハーデンはその後もドンヒョクへの説得、働きかけを続け、ようやく実現に至ったのだ。なぜドンヒョクが渋っていたのか。その所以は本書で明らかだろう。

苦しんでいたのだ。母と兄の死が自らの密告に起因する事実を偽っていたことに。それが絶えず心に掛かっていた故だろう、日本での彼の話は母との関係に傾いていた。良き母ではあり得ず、良き子でもあり得ない、そのわけを縷々語っていた。08年来日当時、安宿の相部屋では「母と兄が処刑された時、二人には怒り・憎しみを抱いていて処刑も当然だと思っていた。今でも時々怒りが込み上げてくる。『あの二人も犠牲者だったのだ』と頭で理解して何とかその怒りを抑えられるようになったのは最近のことだ」と話した。

「保衛員に親のことを告げ口するととても褒められ食べ物も余分にもらえた。それがとても嬉しかった」とも漏らした。

こうして3年余りの歳月を経てようやく世に出たこの書が、いま欧米圏で多大な反響を呼び、さらに韓国語訳、中国語訳出版を控えている。ここに至るまでNKDBはじめ多くの献身と無私の犠牲が伴った。しかして当会会員にささやかな自負を御共有いただくのは許されるだろうと思う。日本で彼をはじめ収容所体験者を最も数多く招いて活動したのはNO FENCEであった。そのベースの上に日本を舞台に様々なシナジーが働き、歯車が噛み合い、実を結ぶに至ったのだと自負したとてそしりは受けまい。ドンヒョクをホームステイさせ

た並河さん母娘、菅原さんはじめ会員各位の献身に思いを致しつつ。

※この原稿をまとめるためリサさんに電話を掛けたら、ロサンゼルスでセミナー中だという。シン・ドンヒョク、ハーデン、ハナ・ソン、ディビット・ホーク各氏ならんでのシンボも。10月17日に日本に戻ったら話が聞けそうである。

## 書評 『北朝鮮 14号管理所からの脱出』を読んで

NO FENCE 世話人 石田英樹

約一年ぶりの寄稿になります。世話人の石田です。今回は、シン・ドンヒョク氏の北朝鮮での収容所体験と脱出、及びその後について書かれた『北朝鮮 14号管理所からの脱出』（ブレイン・ハーデン著）について私が感じたことと今後の NO FENCE の活動にどのように活かしていきたいかを書きたいと思います。

まず、この本はジャーナリストであるブレイン・ハーデン氏が2年以上に渡ってシン・ドンヒョク氏にインタビューを行い、その証言をもとに書かれたものです。収容所に関する記述はそのおぞましい実態とシン・ドンヒョク氏の心の傷の深さを明らかにしています。第5章では、シン・ドンヒョク氏の母と兄が脱走計画について話しているのを聞き、シン・ドンヒョク氏が自分の母と兄の計画について密告したことが書かれています。このことは、シン・ドンヒョク氏の手記『収容所に生まれた僕は愛を知らない』にも書かれておらず、ブレイン・ハーデン氏とのインタビューでも最初は明かすことができなかつたそうです。

密告について長い間打ち明けられなかつたことから、母と兄の脱走計画の密告が心に罪悪感として残り続け、シン・ドンヒョク氏が苦悩し続けてきたことが推察されます。収容所内では密告が日常茶飯事であるらしく、収容所に暮らす人の多くがシン・ドンヒョク氏と似た体験をしているのだらうと思われまふ。

収容所が解体され、中にいた人が解放された時、一人ひとりが大きな心の傷を負い、簡単には普通の生活になじめないことが容易に想像できます。これはもちろん今まで脱北してきた人たちにも当てはまることですが、収容所経験者はさらに深い傷を負っていることでしょう。私たち人権問題に携わる人間は、収容所の一日も早い廃絶を求めるとともに、廃絶したその後どのように中で苦しめられていた人の心を癒し社会に適合できるようにするかということを考えることが必要だと再認識しました。今後の NO FENCE の活動では、最終的にどうなるべきというゴールを明確に意識し、それに向けたロードマップも考えて進めていきたいと思ひました。

（編集後記：最近 NO FENCE の独自集会が開けていませんが、今12月15日の集会の準備を進めています。海外での北朝鮮の強制労働を撤廃させる運動がスタートしました。3頁にご案内しました10月27日の集会ご都合つきましたらお出かけ下さい。本誌紹介の金尚憲さんの一文に圧倒されました。2012年10月19日 小川 晴久 記）